

北の海

井上 靖

中央公論社

カルロス四世の家族——小説家の美術ノート	井上靖	1800円
空海の風景上・下	司馬遼太郎	各950円
一休	水上勉	950円
霧の聖マリ	辻邦生	980円
牧神の午後	北杜夫	580円
火の山にて飛ぶ鳥	芝木好子	950円
円型水槽	曾野綾子	980円
真砂屋お峰	有吉佐和子	950円
夢は枯野を	立原正秋	880円

北
の
海

春

洪作が沼津中学を卒業したのは大正十五年三月である。卒業と同時に、洪作は袂の着物を着た。中学の五年になった時、台北に居る母から紺がすりの袂の着物が送られて来たが、一日も手を通さないで行李の中に入れたままになっていた。それを取り出して着たのである。

中学時代は殆ど小倉の制服で通した。筒袖の紺がすりの着物が二、三枚あったが、制服の方が便利であった。いくら汚れても、擦りきれても、制服である以上、それを恥じる必要もなかったし、第三者の眼にもさして不自然には映らなかった。ぼろぼろになった制服を纏っていても、誰も貧しい家庭の子供だとは思わなかった。

ぼろ服の点では、洪作は学校でも目立っていた。下宿している寺に郁子という洪作より四つほどの娘があり、初めのうちは、洪作の洋服に補綴したり、洗濯したりしてくれているが、そのうちに匙を投げてしまった恰好で、

——もう卒業までこれで我慢なさいよ。補綴を当てるより、切れたままの方が見た眼にまだいいと思うわ。この服を、台北のお父さんやお母さんに見せてあげたいわね。

そういう言い方には多少洪作の両親への非難が含まれて

いた。いくら遠くに離れていても、子供の洋服のことなどにはもう少し気の配り方があるべきだというのである。さすがに口に出してはつきりとは言わなかったが、そういう意味のことは時折郁子の言葉の端々からうかがえた。

しかし、こうしたことに対する責任を両親にばかり背負わせることはできなかった。その大部分は洪作が持たねばならぬものであった。母からの手紙の中に、洋服が小さくなったり、擦り切れたりしたら、新調するがいい、代金を言ってくればいつでも送金する、そういったことが認められてあったことは一再ではなかった筈である。

ところが、洪作は洋服代を請求しなかった。別にそんなことを遠慮しなければならぬ筋合はなかったが、何となくそんなことをするのが億劫であったのである。三年生までは自分の洋服を着ていたが、四年の時、卒業して行く者の不要になった洋服を買った。

洪作自身は卒業生のところへ洋服を貰いに行くような度胸はなかったが、同級生で遊び仲間の藤尾が、洪作に替ってそうした仕事を受持ってくれた。そういうことをやらせると藤尾はうまかった。背丈を見はからって、洪作と同じくらいの体格の卒業生のところへ押しかけて行って、無償で取り上げて来た。

五年になった時も、藤尾は洪作のために卒業して行く生徒から制服を取り上げて来た。

「親のない子は世話がやけるよ」

藤尾はそんなことを言った。

中学を卒業してしまふと、今まで着ていたぼろ服にいくら未練があつても、これを纏うわけには行かなかつた。洪作は初めて袂の着物を着た。沼津市内に家を持っている少年は四年ぐらゐから袂の着物を着始めるのが普通で、それに見慣れてはいたが、自分が着てみると奇妙な気持であつた。

洪作の場合、袂を着るべき年齢になつたから袂を着たのでなく、他に着るべきものがなくなつたので、やむを得ずそれに腕を通したのである。本来なら中学を卒業して上級学校へ進み、新しい制服を着るのであるが、洪作は静岡高校を、四年修了の時と、今年と、二度受験して落ちていた。静岡高校を落ちても、他の学力相応の学校を選び、そこへ進めばいいのであるが、洪作は何となくそんな気持にはならなかつた。木部、藤尾は洪作と同じように静岡高校を受けて落ちたが、木部は東京の私大の予科に、藤尾は京都の私大の予科に進むことになつてゐた。金枝は一高を受けたが、これも落ちて、私立の医科大学の予科にはゐた。

上級学校へ進む志望を持っている者は、たとえ志望校にはいれなくても、どこかの上級学校に落着いた。来年もう一度志望の学校を受け直すにしても、籍だけはどこかの学校へ置くというのが普通だつた。どこにも学籍のない浪人生活を嫌つたのである。従つて、木部も藤尾も金枝もみな着るべき新しい制服があつた。洪作だけはなかつた。

郷里の伊豆の親戚の家で受験準備の一年を過すか、若し親戚で断われたら、これまで通り沼津の寺に下宿して、沼津で浪人生活を送るまでのこと。洪作にとっては、東京の生活はそれほど魅力あるものには思われなかつた。それより沼津が伊豆でのんびりしている方がよかつた。

よほど真剣に受験準備しない限り、来年も官立高校へはいれないであらうということは判つてゐた。しかし、それほど思いつめた考え方はしていなかつた。まあ夏ぐらゐまではのんびり遊ばせて貰ひましようといふところがあつた。

「一体、あんたの家の人どう思っているのかしら。中学を卒業したのに、家へ帰つて来なさいと言つて寄越さないの？」

郁子は言つたことがある。この場合も台北の両親への非難がこめられてあつた。

「台北へ行つたつて仕方がないじゃないか。いつまでも台北に居られるわけではなし。それよりこちに居る方がいい」

「両親や、弟さん妹さんたちに会いたくないの？ あんた」

「会いたくない」

「まあ、驚いた」

「だって、本当なんだ」

洪作は別に両親に会いたいとは思わなかつた。なるべく

なら会わない方がいいという気持だった。小学校時代もそうだったし、中学生になってからもそうだった。

洪作の父は陸軍の軍医だったので、長男の洪作が生れた北海道の旭川を皮切りに、あとは東京、静岡、豊橋、浜松、それから現在の台北と任地を転々としていた。

洪作は五歳の時、両親のもとを離れて、郷里伊豆の祖母のもとに預けられた。丁度母は胎内に洪作の妹を持っていた時で、人手もなかったし、ごく一時的のつもりで洪作を祖母に託したのであったが、それ以来何となくずるずると洪作は祖母のもとで生活するようになってしまった。祖母も手ばなせなくなったであろうし、洪作も亦祖母から離れ難くなった。そんなわけで洪作はひとり家族から離れて、小学校時代を伊豆で過した。小学校六年の時祖母が他界すると、洪作は父の任地浜松に行つて、中学を受験して落ち、高等科の一年間を家族と共に生活し、浜松の中学にはいったが、父の台北赴任と共に、洪作はまた家族と別れて、郷里に近い沼津に移り、そこで中学時代を送ることになったのであった。父は台北へ行つても、職業柄いつ転任するかも知れなかったので、子供の洪作がそれと共に中学を転々とするのではないようにという考えから出た措置であつた。

沼津中学に転じたのは二年の初めであつた。こういうわけで、洪作は小学校から中学へかけて、その大部分を家庭の雰囲気というものは知らないで過していた。小学校時代

は祖母の許で過していたが、この祖母は医者をやっていた曾祖父の囲い者だった女性で、曾祖父が亡くなつてから洪作の家の籍にはいつていた。そうした関係で戸籍の上では洪作の祖母ということになっていたが、血は通つていず、言つてみれば他人であつた。しかし、洪作はこの他人である祖母に愛され、洪作の方もまたこの他人である祖母を慕つた。

この洪作と祖母との共同生活は、どこかに多少取引きの匂いがあつた。祖母は洪作を自分の手許で育てることに置いて、いくらか不安定な自分の地位を固めるといったところがあり、洪作はこの祖母に忠誠をつくすことに依つて、その愛を際限なく引き出すといったところがあつた。

ともかく、洪作は幼少時代をこの祖母と共に郷里の家の土蔵の中で送つたのであつた。別に不自由はなかつた。村の人や親戚の人たちから、時に、

——あんたは可哀そうに、あの気の強いおばあさんの人質になつてしまつて。

そんなことを言われたが、洪作には気が強いとも意地悪だとも思われなかつた。充分優しい愛情深い祖母だったのである。人質になつていたのかも知れないが、充分結構な人質だったのである。

そして中学時代は下宿で、この方は全くの監督者なしに、至極のんびりと過した。

洪作の幼年期から少年期へかけての過し方は、他の少年

に較べると多少特異であつた。家族の一員としての生活は浜松においての二年間だけで、あとは洪作の身辺には家庭の雰囲気というものは全くなかつた。

しかし、洪作は継子でもなければ、貰い子でもなかつた。れっきとした父と母の子供であり、しかも両親からは充分総領息子としての取り扱いをうけていたのである。ただこの一組の両親と子供を第三者が冷静に観察していたら、あるいは他の家庭とのいくらかの違いは発見できたかも知れない。

両親の方は自分たちから離れて勝手に生い育ち、いつか思春期の少年になつてしまつたわが子の取扱ひに多少戸惑いを感じるところがあつたに違いないし、洪作の方も両親というものに対して、どのような対い方をしていいか見当のつかぬところがあつた。

寺の娘の郁子から、

「両親や弟さん妹さんたちに会いたくないの？ あんた」と言われても、正直に答えると、

「会いたくない」

と言うほかはなかつたのである。実際に父親に会いたいとも、母親に会いたいとも、弟や妹たちに会いたいとも思わなかつた。会えば会つたで、悪いことではないかも知れなかつたが、特に会わずにはいられないといった思いはなかつた。会わなくても、いっこうに痛痒は感じなかつた。

むしろ、相なるべくは会わない方がよさそうであつた。

会えば、子として親に氣を遣わなければならなかつたし、親の言うことに従わなければならなかつた。そうしたことは面倒でもあり、億劫でもあつた。

——恐ろしくずばらに仕上つちやつたな。

仲間の一人である金枝が、五年の三学期にはいったばかりの時に言ったことがある。台北の母親から来た手紙を開封しないで、二、三本溜めたことがあり、それを知つて、金枝は概歎の言葉を口から出したのであつたが、その時洪作は、

——平信と書いてある。

そう言つて、封書を金枝の方に示した。確かにそこには「平信」と認められてあつた。平信というのは、別に特殊な用件でもないし、急ぎの用件でもないということである。そうわざわざ断わり書きしてある以上、別にあわてて開封する必要はないではないか、そういった洪作の氣持だったのである。母の手紙に受験についての希望が述べられてゐることは、それを読まないでも判つてゐた。将来医者になるために高等学校は理科乙類を選べというのである。洪作にとっては読みたくない手紙であつた。読みたくない手紙は読まなくても過せるところが、親許を離れて育つてゐる少年の特権であつた。

中学を卒業してからまだ一カ月になつてゐなかつたが、洪作は自分の生活がすっかり變つたものになつてゐるのを感じないわけには行かなかつた。中学生の時は、毎日のよ

うに、藤尾、金枝、木部といった連中と顔を合せて、夜も昼も、大部分の時間を彼等と一緒に過していたが、四月を境にして、お互いの往来がぱったりと絶えてしまった形だった。それぞれが新しい生活にはいつて行くための準備もあったし、もう中学の制服を着ていないので、今までのように隊伍を組んで町をほったき歩いてゐるわけには行かなかったのである。

洪作は袂の着物を着て、久しぶりで町へ出たが、この間まで自分の町だと思っていた沼津が、いやによそよそしく冷たいものに感じられた。相変わらず町には中学生の姿が見られた。これがまたこの間までは確かに自分の下級生であったのであるが、いまはそういう感じは持てなかった。大体、立ち停つて敬礼してくれる者がなかった。こちらが中学の制服を着ていないので、誰が誰か判らないということもあったが、そのためばかりではなかった。

顔見知りの下級生に会つても、眼を逸らせて知らん顔をして通り過ぎる者が多かった。この間までは上級生だったから敬礼してやつたが、卒業してしまつた今は、上級生でも何でもない、敬礼なんかしてやるものか。どの顔もそんなことを言っているように見えた。

よくしたもので、この間までは洪作たちの前では小さくなつてゐた四年生が、いまは大きな顔をしてのし歩いており、いつか最上級生としての貫禄を身につけて、休までひと廻り大きくなつた感じである。それに洪作などを何者で

あるか知らない、いやに金ボタンをぴかぴかさせた新入生の姿も、町には氾濫してゐた。それを見ると、否応なしに洪作は、もうお前の時代ではないといった思いを持たせられざるを得なかつた。

要するに、洪作は中学卒業と同時に、上級生としての權利と栄光を剝奪され、そして自分のものだと思つてゐた町まで明け渡すことを余儀なくされてしまつた恰好であつた。

洪作は御成橋の袂にある藤尾の家に寄つたが、藤尾は下宿探しに京都へ行つてゐるとかで留守だった。駅に近いところにある木部の家にも寄つてみたが、木部も亦四、五日前に、こんどはいつた私立の大学の運動部からの呼び出しがあつて、三月末に上京したまま、まだ戻つて来ないということだった。

最後に金枝を訪ねたが、この方は微熱を出して床に就いてゐた。今までなら平気で庭伝いに裏に廻つて、金枝の部屋を襲うのであるが、袂の着物の手前、そういうこともできなかつた。

洪作は久しぶりで千本浜へ出た。松林の中を白い砂を踏んで行くと、松の木と松の木の間から、波の碎けている海が見えて来た。浜には人影はなかつた。洪作は波打際を狩野川の河口の方へ歩いて行き、河口がもうすぐそこだといふところから引き返した。春ではあつたが、海からの風は冷たかつた。

洪作は砂が風のために吹き寄せられて高くなっている場所へ行つて腰を降ろした。そこは何軒か並んでいる別荘地帯の裏手に当たっていたが、どの別荘も夏以外は閉まっていたので、広い千本浜の中でも、そこだけ妙に閑散とした一画を成していた。いつかみなでここに来た時、金枝が、

——別荘という奴は開いている時は死んでいるが、閉まっている時は生きている。

と言ったことがあった。すると、藤尾が、

——なるほど、開いている別荘は俗物だが、閉じている別荘は思想を持っているな。

と言った。それを受けて、木部がたちどころに詩を作った。

——開いている別荘はお喋りなおちゃっぴい娘、閉じている別荘は老いた貴族の未亡人。

その三人三様の言い方を洪作は感心して聞いたものである。

その閉じている別荘の裏手の砂丘に、洪作は腰を降ろしていた。金枝も、藤尾も、木部もみな、やがて沼津から離れて行く。それぞれ沼津に家を持っていて、そこで生れて、これまで生い育ったのであるが、その家庭というものから今や離れて行くこうとしている。いかにも巢から飛び立って行く感じである。

洪作はぼんやりと海を見ていた。波の荒いことで知られている駿河湾であり、この日も波は荒かったが、よくした

もので潮の光にも、その動き方にも、春が感じられた。

——さて、俺は、どうしようか。

洪作は思った。台北の両親のもとに帰らないとすると、どこに居てもよかった。ただ、その場所は限られていた。このまま沼津で浪人しているか、郷里の伊豆に何軒かある親戚のどこかに厄介になり、浪人の一年間を過すかである。これまで洪作の気持は今まで通り沼津の寺に下宿していることに傾いていたのであるが、その気持に多少ひびがはいった恰好だった。仲間の誰もが居なくなった沼津という町が、ひどく冷淡なものであるかも知れないという思いに、洪作は駆られ出していた。

洪作は砂の上に寝転んでいた。睡気が襲い始めていた。日光の直射を避けるために腕を折り曲げて袂で顔を覆った。こういう使い方をすると、袂というものも便利だと思った。

どのくらい眠ったか知らないが、洪作は人声で眼を覚ました。中学の制服を着た三人の少年が、洪作を取り巻くようにして立っていた。洪作はすぐその一人が、級は違いが、同学年で、今年落第して卒業できなかった遠山であることを知った。

「どうも、変な奴が寝ていると思ったら、おまえか」

遠山は言った。洪作は遠山とは親しく交際したことはなかったが、同じように柔道の選手をしていた関係で、二、三回一緒に他校へ仕合に出掛けたことがあった。他の二人

は名前は知らないが、いつも不良がかった服装をしていて、学校では目立っている少年たちだった。

「お前、まだ沼津に居るのか」

遠山は言つて、洪作の横に腰を降ろした。二人の少年もそれに倣つて腰を降ろすと、一人がポケットからバットの箱を取り出した。バットの箱は遠山の手に渡し、洪作の手に渡つた。

「学校はどこにはいったんだ」

「どこにもはいらん」

「浪人か」

「まあ、な」

「まあ、な、つて言つても、どこへもはいらなかつたら、れっきとした浪人じゃないか。家はどこ？」

それからすぐ氣付いた風に、

「そう、そう、親がなかつたんだつたな」

「冗談言うな。ちゃんと両親がそろつてゐる」

「ああ、そうか、そりゃ、悪かつたな。確かに誰かそう言つてたんだがな。じゃ、いつ、家に帰る？」

「家には帰らん。——台北なんだ」

「いいな、お前、うまくできてるんだな。家はちゃんとあるのに、遠くて帰れんとは理想的じゃないか。沼津に居るのか」

「まだ決めてない。——沼津に居てもいいが、相棒がない」

「受験勉強するんだろう」

「今からしても、みんな忘れちゃう。八月まではのんびりと遊ぶつもりだ」

「じゃ、道場に来いよ。塚本がやめちゃつたんで、下の奴らを叩くの困つてるんだ」

遠山は言つた。塚本というのは、この春学校を退いた柔道教師のことである。

柔道と聞いて、なるほど毎日午後二、三時間、中学の道場でどたんばたんやっていたら退屈しないで過せるだろうと思つた。遠山は落第したお蔭で恐らく柔道部のキャプテンの椅子に坐るだろう。その遠山から依頼されたのだから大威張で道場に出入できる。おまけに柔道教師も居ないので、遠慮しなければならぬような相手はない。

ただ道場へ出入する途中、校庭で教師たちに会うことがあるだろうが、それが多少鬱陶しいぐらいのことである。が、これはまあ、辛抱してできぬことでもあるまい。

「よし、練習に行くよ」

洪作は言つた。

それから洪作は遠山たちと一緒に千本浜を出、街中の中華料理店へはいつて行つた。

「卒業生と一緒に堂々といれ。自分の意志ではいゝんじやない。卒業生に御馳走なりに連れて行つて貰うんだ」

遠山は二人の少年に言つた。

「俺は御馳走しないぞ、金は持っていないからな」

洪作が言うと、

「こいつが持っている」

遠山は二人の少年のうち小柄な方を眼で示して言った。

制服の上着の上の方のボタンを二つ外し、いっぱし不良がかった恰好をしているが、まだ稚さが顔に残っている少年だった。遠山に言わせると、凄く敏捷で喧嘩はうまいということだった。二人ともこんど三年生になった連中だった。

「三年生に奢って貰うのはだらしないな。遠山、お前出せよ」

洪作が言うと、

「かまわん、かまわん」

遠山は言って、

「お前、不自由しているようだったら借りておけよ。いま、こいつ大金を持っているんだ。親戚中から借りたんだ」

すると、少年はポケットから紙幣束を取出して、

「よかったら、使って下さい」

ひどく気まえがよかった。

「しまっておけよ、ばかだな」

洪作は卒業生らしい口調で言った。こうした不良になりかかりの少年たちと付合うのは、洪作としては初めてののことだったが、これまでの藤尾や金枝たちの文学好きな仲間とは違ったある面白さがあった。

洪作はその日、寺へ帰ると、庭を掃除していた郁子に、

「このまま、ここに置いて貰う」

と言った。

「ずっと居るの？　ここに」

「うん」

「お師匠さん、何と言うかしら」

郁子は言った。郁子は父親のことをいつもお師匠と呼んでいた。

洪作は毎日中学の道場へ顔を出すことにした。学校の授業が終るのが大体三時だったので、道場に部員たちが集まり、練習を始めるのは三時半頃からである。

洪作は三時に寺を出て、沼津の町中を通り、御成橋を渡って、田圃の中の道を中学の正門へ向って歩いて行く。中学時代毎日のように往復した道である。

洪作はこれまで着ていた中学の制服を着込んで、靴はやめて、下駄をつっかけることにした。学帽をかぶっていないことと、下駄履きであることだけが、中学生と異っている。洪作は小柄だったので、四、五年生たちの中に混じると、いっこうに卒業生とは見えなかった。

——あいつ、卒業した筈なのに、また同じような恰好して学校へ来始めやあがった。

四、五年生たちは洪作についてそんな噂をしているに違いなかった。しかし、面と顔を合せると、知らん顔をして

すまずわけにも行かないらしく、

——やあ。

とか、

——おう。

とか、短い挨拶の言葉を口から出した。これまでは敬礼をしたが、もう敬礼まではする必要はないと思っているらしく、そんな態度でごまかした。下級生たちの方は相変らず緊張して洪作に敬礼した。

洪作は相手が顔見知りである場合は、同じように、「やあ」とか、「おう」とか言って、挨拶に答えてやるが、そうでない場合はいっさい黙殺の態度をとった。

道場へ行くと、部員たちの間では大きな顔ができた。卒業前までは確かに選手であつたし、先輩であることに違ひなかつたので、みんな洪作に一応の礼をつくした。居心地は悪くはなかつた。

十日程、道場に通うと、洪作はすっかり自分の後輩である部員たちの生活に溶け込んでしまつた。練習を終えようと寄宿の浴場に行つて汗を流し、それから誰かと連れ立つて町へ出掛ける。一緒に中華料理店にはいる。そういう時大抵遠山は一緒である。

「先輩と一緒に堂々といれ」

遠山はいつもほかの連中に言つた。一応先輩には違ひなかつたが、洪作はめつたに金は払わなかつた。

「先輩は腹がへつてゐる。御馳走して差し上げろ」

遠山は言つた。誰かが金を払つた。遠山も金を払うことはなかつた。

「本来なら俺は洪作と同じように卒業生なんだぞ。それを卒業しないでいるだけの話だ。卒業生なみに取り扱え」

遠山は勝手なことを言つた。しかし、遠山は誰からも憎まれてはいなかつた。不良がかつてはいたが、不良ではなかつた。

洪作は四年になつた時から柔道の選手になつており、対校試合で五人の選手が選ばれる時は、必ず先鋒の役をつとめるか、副将の場所に坐つた。小柄で、特に得意技があるというわけではなかつたが、仕合巧者で、仕合になると必ず勝つた。

「お前みたいな小さいのが、どうして仕合で勝つのかな」四年の時、柔道教師から真顔で言われたことがあつた。

「他校の知らん奴とぶつかる」と、いつも勝ちそうな気がする。負けそうな気はしない。どうして勝とうかと思うだけです」

洪作は答えたが、これは嘘ではなかつた。どんな大きい図体の相手にぶつかつても、相手の柔道着の襟や袖を掴んだ瞬間、洪作は相手を倒すことだけを考へた。相手は自分より強そうだとか、もしかしたら敗けるのではないか、そんな気持になることはなかつた。

「惜しいものだ。勉強の方でもそうだといふんだがな」柔道教師は慨歎した。確かにその通りだつた。試験にな

ると、学期試験であれ、入学試験であれ、答案用紙を渡される前から、もうだめだと思った。英語でも、国漢でも、物理でも、化学でも、課目の何たるかを問わず、みんなだめだと思った。自信というものはいっさいなかった。そのくらいだから静岡高校を受けても、入学できるなどとは初めから思っていなかった。ただ受験してみただけである。

遊び仲間の藤尾や木部も同じように静岡高校を受けて落ちていた。この方は何かの僥倖で合格できないものでもないといった気持があったが、洪作の方は初めからそんな気持は持ち合せていなかった。まあ二、三年のんびり受験勉強していれば、そのうちには何とかなるだろう、——これが洪作の気持だった。だから洪作は腰かけに他の私立大学へはいつておこうとか、予備校で勉強して来年を期そうとか、そういった思いつめた気持はなかった。官立の高校を目差すのは、台北の両親が、どうもそう思い込んでいる風なところがあったので、両親の夢をこわしては悪いと考えた上でのことだった。両親は洪作が浜松中学に上位で入学していたので、いまでも依然として優秀な生徒であると思いつ込んでいた。洪作にとっては甚だ迷惑なことだった。

そこへ行くと、柔道の方は、勉強に引きかえ、自信があった。少し練習したら、目をつぶっていても初段ぐらいとれるという気持だった。四年の時から校内では黒帯をしめていたので、これを講道館の黒帯にするのも悪いことではなかった。十日程、中学の道場に通っているうちに、入学

試験のことは洪作の頭から消えて、それに替って、黒帯がはいり込んで来たのである。

藤尾、金枝、木部、それに洪作の四人が久しぶりに顔を合せたのは、四月も下旬にはいつてからだだった。近くそれぞれ自分で選んだ進学コースに従って、沼津をあとにして東京や京都に散って行くので、一応ここで沼津中学時代の打上げ式をやっておこうというのが、この集まりの目的であった。会場は千本浜の入口にある清風荘というトンカツ屋の二階にした。このレストランには洪作たちは去年の秋初めて足を踏み入れ、その時食べたカツレツの味が忘れられず、それ以後も誰か金を持っていると、よく出掛けて行った。勿論中学生がこのようなところへはいることは禁じられていたので、いつも裏口からはいった。

「あんたたちの来るところじゃないよ」

肥った内儀さんは一応意見めいた口のきき方をしたが、それでもビールも運び、料理も運んで来た。

「これだけのカツを食わせるところは、東京でもそうたくさんはないと思うんだ」

こうした方面には明るいことで自他ともに許している藤尾は、そんな言い方をしたが、だれも反対する者はなかった。大体他のレストランなるものを知っている者はなかった。生れて初めて胃の腑に収めるレストランのカツレツの味であった。うまからぬ筈はなかった。藤尾が尤もらしい

言い方で日本一の味だと言え、みんなそれはそうだろう
と思った。異論など唱える者はなかった。

しかし、中学を卒業したいまは、誰に遠慮もなく堂々と
清風荘にはいることができた。教師の眼を怖れて、裏口か
らはい入る必要はなかった。

洪作が清風荘の二階へ行った時は誰もまだ姿を見せてい
なかった。肥った内儀さんがやって来て、

「木部も、金枝も、藤尾も、みんな来るんだね」

と、いつもの男のような言い方で念を押した。内儀さんは
誰のことも苗字を呼び棄てにした。洪作だけは、どうい
うものか苗字は呼ばないで、洪作、洪作と名前を呼んだ。

「木部と金枝は東京に行き、藤尾は京都へ行くんだってね。
おかげで沼津の町も品がよくなるよ。洪作のことは聞いて
いないが、あんたはどうするんだい」

内儀さんは言った。

「沼津に残っているつもりだ」

「学校を卒業したのに、沼津に居るといふのはどういうこ
とだね」

「ここで受験勉強するんだ」

「勉強!? 本当に勉強ができるかね。また悪い友達と一緒
になってのらくらしてしまふんじゃないかね」

「そんなこともあるもんか」

「さあ、どうだかね。——まあ、親許へ帰る方が無難だろ
うね。親があるんだから」

内儀さんはテーブルを拭いて出て行った。

木部がやって来た。小柄だが、どんな運動でも一応こな
すびちびちした体を、紺の筒袖の着物で包んでいる。

「よお」

そう言つて部屋へはいって来ると、

「泳いで来た」

いかにも疲れたといったように、木部は畳の上に仰向け
に倒れた。

「一人で泳いだのか」

「うん」

「水が冷たいだろう」

「冷たい。——金枝も、藤尾もまだか。さきに注文して食
っちゃうか。腹がへった」

それから手を鳴らした。暫くすると内儀さんがはいつて
来て、

「子供のくせに、人なみに手なんて鳴らすもんじゃない
よ」

と言った。

「何かさきに食わせてくれ」

「みんな揃つてからにしないさい。東京へ行ったら、氣を入
替えて勉強しないとだめだよ」

「判った、判った」

「寝転んで話をするもんじゃない。起きて話さない」

「いやになっちゃうな」

木部は起き上った。そこへ藤尾はいって来た。藤尾は金ボタンの大学の制服を着ており、部屋へはいるとすぐ上着を脱ぎ、

「今日は送別会だ。おばさん、腕によりをかけてうまい物を作ってくれよ」

と言った。藤尾は肥満型で、体格も、口のきき方も大人になりにかかっている。

「えらそうなことを言うんじゃないよ。親のすね嚙りのくせに。——送別会って誰の送別会だね」

「みんなのだ」

「洪作は沼津に残るって言ってるよ」

「そうなんだ。こいつだけは送られたくても送られようはない。おばさん、頼むよ、この子を」

「断わるよ」

「邪慳なこと言うなよ。寺のめしだけじゃ栄養不良になるから、時々カツでも食わせてやってくれ」

「商売だから、金を払えばいつでも食べさせて上げるよ」

「その金が、洪作の場合、とかくあり余るというわけには行かん」

「あんたのところへつけておくよ」

「うえっ！」

藤尾は仰向けにうしろに倒れると、そのまま足の方からくるりとひっくり返った。すると、それをみていた木部が、

「こういうことができるか」

と、両腕を畳の上につき、腰を上げて、両脚を腕にからませてみせた。

「これ、これ、静かにおし、いい年齢とをして」

内儀さんはたしなめながら、部屋を出て行ったが、間もなくビールを持ってはいって来た。

「これは、わたしが御馳走してあげる。送別会だから」

それと一緒に、こんどは洪作が体を前に折ると、そのまま両脚を突き上げて逆立ちしてみせた。

藤尾、木部、洪作の三人がビールを飲んでいる時、金枝が袂の紺の着物を着てやって来た。

「すげえメッチェンに、いまそこで会った」

金枝はいきなり言った。

「どれ、どれ」

藤尾がすぐ立ち上って、窓から街路をのぞいた。

「居ないじゃないか」

それから藤尾は手を額のところにかざして、

「——美しきものは、いずこに去りたるや」

「居るもんか、もう。しゃなりしゃなり型じゃないんだ。ちよっとよかったな、いまのは」

金枝は言って、テーブルに頬杖をつくとき、

「俺は、この頃、しきりに美女に心を奪われるようになった。どうも、この傾向はいけなないと思うんだ。しかし、これが青春というものなんだから、施すすべはない」